

ねりま小中一貫教育レポート

〇●〇 第 4 号 〇●〇

平成 24 年 8 月

発行：教育企画課・教育指導課

小中一貫教育の取組をさらに進めるために、小中一貫教育の先進自治体である広島県呉市から呉中央学園教頭：二宮肇美（にみや・はつみ）先生をお招きして、8月3日に「小中連携推進教員（連携クリエイター）研修会」を開催しました。二宮先生の講義概要を紹介します。



◆なぜ小中一貫教育に取り組み始めたのか

10 数年前、全国で小学 5・6 年生の学級崩壊が頻繁に起きていました。なぜ起こるのか・・・既潮者や身長伸びを見ると、思春期に入るのが 2 年くらい早くなっている。思春期は自尊感情の急激な低下が起こる時期です。それを乗り越えて成長するわけですが、うまく乗り越えられない子供が増えてきたのではないかと考えました。そこで、呉市では、小中 9 年間で 4-3-2 年で区切り、9 年間を一貫したカリキュラム、一貫した指導体制で教育活動を進めることにしたのです。

◆小中連携と小中一貫の違い

小中連携は、一部分で連絡・連携はするけれど、小・中それぞれのねらいがあり目標があり、別々に進んでいくこと。小中一貫は、同じ目標・同じ方針をもって進むこと、と捉えています。13 年間、小中一貫教育に取り組んできた経験からすると、連携では小中の壁は乗り越えられないと思います。小・中それぞれの長い歴史があり良さがあります。違いがありすぎて、連携では乗り越えられないのです。

◆あってもいい段差と、ない方がいい段差

私は中学の教員ですが、小中一貫教育のなかで小学校の担任をもつことがあり、さまざまな小中の違いを体験しました。例えば、子供たちへの関わり方の違い。提出された宿題を確認したら、中学ではハンコを押すだけでしたが、小学校では、ひたすら〇つけ

をして、よくできた子には花丸をつけたりする。テストも中学では返したらそれで終わりですが、小学校では間違えたところを子供が直してまた持ってくる。生活のルールも違う。中学ではベルがなるまでに教室を移動して着席しているのがルールですが、小学校では、ベルがなったら並んで教室移動を始める。そんなことは知らずに、中学1年生にどうして「ベル着席」ができないの、と叱っていたことを反省しました。

小中の違いがたくさんあって、子供たちはこの違いを乗り越えるわけです。あってもいい段差であれば、乗り越えて成長するわけですが、乗り越えられないような段差はなくした方がいいと思いました。

◆中期（小5・小6・中1）の指導体制の見直し

(1) 乗り入れ授業

持ち時間にゆとりのある教科で、中から小への乗り入れ授業を行っています。6年生の算数を少人数クラスにして、発展クラスのすべての授業を中学の教員がもちました。すべての授業をもつので、宿題も中学の教員が出します。すごく力がつきました。

(2) 一部教科担任制

複数の先生が入ると、担任だけのルールが通用しなくなる。違った視点で教えてもらうことに意味があります。子供たちへのアンケートでは、5年生の95%、6年生の100%が、いろいろな先生にみてもらうのがいいと答えていました。

(3) 期末試験の導入

小学校と中学校の評価の相関関係を見ても、小学校の算数で「十分満足(3)」の通知表をもらっていた35人のうち、中学1学期の数学では3人が「2」、14人が「3」の評価をもらっていました(右表参照)。これでは自信をなくします。小学校の单元テストと、中学校の定期テストの差が大きすぎるわけです。

小中の評価の比較
(7学年1学期算数・数学)

小6						
3	(35)	3	14	11	7	
2	(25)		10	12	3	
1	(10)	3	6	1		
		(3)	(19)	(27)	(14)	(7)
評定		1	2	3	4	5 中1

通知表等の評定の違い

そこで、5年生の1学期に国語と算数の定期テストを行い、2学期には社会を加え、6年生では理科と社会を入れて4科目で行っています。ねらいは、計画的に学習する力を身に付けることにあります。

◆異学年交流活動は、カリキュラムに位置付けて実施する

呉中央学園では、1年生から9年生まで、「夢チャレンジ」という生き方学習の時間をもっています。1・2年生は生活科で、3年生から9年生までは「総合的な学習の時

間」で実施しています。「夢チャレンジ」では、職場ウォッチングや職場体験、異学年交流活動を行います。

交流活動を教育課程外の活動にしてしまうと、負担が増えてしまいます。カリキュラムにきちんと位置付けることで、続けられる活動になります。「総合的な学習の時間」のすり合わせができれば、授業のなかで交流ができます。

異学年交流は、ただ交流するだけでなく、事前事後の指導が大事です。何のために取り組むのか、を確認しながら実施しないと、取組が形骸化します。

◆9年間を一貫した指導体制で「家庭学習を増やそう」

家庭学習を増やさないと学力がつかえません。まず、全学年で家庭学習時間のデータを取り、家庭学習時間が少ない子、ほとんど勉強していない子がこんなにいるんだ、と全教員で共通認識をもちました。だらだら勉強しても力はつかないので、時間を意識して



勉強させるようにしたい、と「自立ノート」(=写真)というものを作りました。「自立ノート」には勉強時間のほか、寝た時間、テレビを見た時間、朝食をとったかなども記録して、小学1～4年までは毎日、保護者にサインをもらいます。小学5年以上になると、到達度に応じて、保護者にサイン

をもらう回数を減らしていき、徐々に自立を促します。

宿題の研究も9学年で行いました。宿題を1年から9年まで並べてみると、いろんなことがわかります。宿題が生きてくる授業とはどんな授業なのか、出す宿題は子供にふさわしいものなのか、などを研究しました。こうした取組で家庭学習の時間が増え、それにしただって学力調査も伸びました。

学習習慣を把握するために、一人一人に「学力向上マップ」というものを作りました。1枚の紙に国語、算数・数学、生活で1年から9年までの各学年の到達目標を示し、学年の終了時に目標に達成したところに印を付け、次の学年に送るようにしています。

習慣というのは、大きくなってからでは、なかなか定着しません。中学でこんなことができなくて困っている、ということがあれば、是非、小学校の先生と手をつないで取り組んでほしいと思います。

◆小中一貫教育のシステムづくり

小学校は45分授業、中学校は50分授業で時程が異なりますから、2時間目って何時何分から？ とお互いにわからなくなります。5分の違いで乗り入れができなかつ

たりします。小と中で3時間目と5時間目のスタート時間をそろえることで、小中の時間調整が楽になりました。

「日程調整が難しい」というのは最も大きな課題です。年度末には是非、校区で来年度の年間行事のすり合わせをやっていただきたいと思います。お互いに年間予定を組んでしまってから日程調整をしようとするは大変です。合同研修会などは、年度が始まる前に年間計画に組み込んでしまうことが大事です。

研究組織も、今までの組織にかぶせると一部の教員に多くの仕事が集中して失敗します。全員で取り組めるよう、きちんとした位置づけが必要です。

◆小中一貫教育は目的ではなく、手段である

子供たちの課題を共有し、どうすればいいのか、を考える手段として小中一貫教育があります。何のための取組かを確認しながら、取組をカリキュラムに残していくことが大切です。小学校でやっているいいことを中学校でもやってみる、中学校でやっているいいことを小学校から始めてみる、これは比較的簡単にできます。

◆まず、何から始めますか

校区の小・中学校で協力して解決していきたいことは何でしょうか。

子供たちの実態から小中一貫教育はスタートします。ここに課題がある、望ましくない実態がある、だから、こんな取組をしてはどうか、と小中で話し合ひましょう。あれこれたくさん決めるとやりきれなくなりますから、まず取り組むことを、ひとつ決めましょう。そして、その取組で、子供たちをどう変容させたいのか、共通認識をもちます。

◆子供たちの変容のデータを取りましょう

取組によって、課題のあるところがこう伸びた、という実感がないと、先生方の元氣が出ません。取組の事前事後には、必ず子供たちにアンケートを取って、データとして可視化しましょう。どんな変容をねらっているのか、その変容はどのような調査で読み取れるか、を話し合い、アンケートの質問項目とします。

取組を続けると、感動的に子供が変わってくるのがわかるはずです。

◆小中一貫教育の成果が実感できるまでに3年かかる

呉中央学園では、7年間、小中一貫教育の研究を行いました。実際に成果が出たと言えるのは、4年目以降でした。小中一貫教育に取り組んだ子供たちが中学にあがってきて、今までと違うぞ、と成果が実感できたのです。単年度だけでは成果が出ないということを理解していただければと思います。